

アルゼンチンと パラグアイの 日系農場視察レポート

（株）ギアリンクス
Campo Baradero, Argentina



ギアリンクスのパラデロの農場の前に立つ、中田智洋社長。背景の看板には、「私たちは、この国の人々の協力をいただいて、この広大な農地で、日本の食料確保をめざしていきます」とあった。

日本の食料自給率が40%を切ったといっても、誰も深刻な顔をしていない。スーパーマーケットに行けば、相変わらず食品は山と積み上げられている。価格は若干上がってはいるものの、陳列棚がガラガラという逼迫した状況ではない。だから、温暖化現象やエタノール需要で穀物が高騰しているといっても、ピンとこないのだ。食料危機は知識としては理解しているつもりで、ピンとこないどころに、「何とかかなるだろう」という安心感がある。また、いざとなったら国が何とかしてくれるだろうと、淡い期待もしている。確かに、アフリカの最貧国のように日本には食料がないために餓死する子どもはいない。しかし、決して予断を許さぬ状況がヒタヒタと押し寄せているのである。

「必ず食料危機は来る」と断言するのは、岐阜県中津川市で、もやしやかいわれダイコンの水耕栽培をしている（株）サラダコスモの中田智洋社長である。石油の高騰によって多くの食品が影響を受けているし、飼料作物の高騰は畜産や養鶏農家に大打撃を与えている。病人でなければ卵を食べられなくなるといっては、あなたがち大げさな話ではないようだ。

「だから、いざという時のために、平常時から食料確保のルートを開拓しておかなければならないと思っています。南米の日系農家と交流を深めて、非常時には優先的に売っていただくということを考えています」と、中田社長は言う。

中田さんが中心となって展開している（株）ギアリンクスの事業を視察するため、本誌は、1月29日から2月8日までのツアーに参加した。

びいているように見えました。人々は温かく、高齢の日系農民が一生懸命働いている姿に感激しました」

しかし、現地の日系移民は必ずしも幸せではなかった。広大な農地を耕作しているものの、販路の選択肢がない。ほとんどは穀物メジャーといわれるアメリカの巨大な商社に首根っこを押し込まれてきた。中田社長は心の奥にあった愛国心のようなのものが燃えた。

「日系農家の方々は困難な開拓をしながら、多くの犠牲をはらって畑を耕作しています。それでも、気軽に日本に帰れる状況ではありません。何とかしてあげたい、故郷に錦を飾ってほしいと強く思いました。われわれにしたって、将来、絶対的に不足する大豆、トウモロコシなどの輸入が確保できるなら、こんないいことはないわけですね」

なぜ、アルゼンチンがいいかという点、南半球にある国だからです。北半球の国々、日本や中国やアメリカなどが、もし冷害などで農作物が取れなくなると、四季が反対の南半球の国なら大丈夫かもしれません。それに、アルゼンチンは外国資本に対して土地取得の制限がありません。この事業はぜひ成功させなくてはならないと思いましたが、結果的に岐阜県の計

「食料危機に備えて、 太いパイプをつくって おきたい」

（株）ギアリンクス 中田智洋社長の挑戦

非常時のために
「海外備蓄」という発想

もともとこの事業は、1998年、梶原拓前岐阜県知事がじきじきに中田社長にかけてきた1本の電話から始まった。

「食料危機になった時に、岐阜県民の食料をいかに確保するかを考えている。南半球のアルゼンチンで農場を経営し、非常時にはそこで生産された農産物を輸入しようと思うが、協力してもらえないか」というものだった。当時、岐阜県は「岐阜県民食料確保計画」を検討中だった。岐阜県の食料自給率は36%しかなく、このままでは非常に危険な状態になる。県は5億円を出資してアルゼンチンに農地を取得し、日系移民に耕作を委託し、経営は民間企業の協力



パラデロのギアリンクスの農場。ここで栽培された大豆が輸入されて豆腐、みそ、しょうゆが作られている。

から1口10万円の出資を仰いで株式会社を設立、推進しようと考えた。中田さんはメディアや講演会、友人、知人などあらゆる機会を通して、この事業の重要性を熱心に訴えた。徐々に賛同者が現れた。経営者ばかりではない、主婦や教師や、一般の会社員といった人々も出資してくれられた。出資した人たちは配当を求めてというよりも、この事業の趣旨に賛同し応援したいという人がほとんどだった。

2000年12月、資本金1500万円、株主約45人、岐阜のギト、アルゼンチンのアが提携するということ意味で、株式会社ギアリンクスが設立された（2008年1月現在、株主470人、資本金は9990万円になっている）。市民による市民のための市民企業が誕生した。

中田社長は、本格的に事業を進めるためにアルゼンチン通いが始まった。まず、土地探しから始めなければならない。土地が耕作に適しているか、協力が得られる日系農家はいるか、輸出までの手続きがスムーズにいくか、また、移民政策を担当してきたJICA（独立行政法人国際協力機構）との折衝も重要な仕事だった。

何しろ、アルゼンチンは遠いアメリカ経由でも、ヨーロッパ回りでも約33時間かかる。一回の出張には最低でも10日間は要する。その間、本業のサラダコスモの仕事は留守になる。しかし、途中では放り出せない。ギアリンクスは6800万円を投じて、アルゼンチンのマグダレーナに約46ha、パラデロに約550ha、メンドーサ州のアンデスのふもとに約600haの農地を取得した。これらの土地はいずれもJICAが日本からの移住者用に持っていたものだが、南米での移住事業を閉鎖するに当たって、売却を予定していた土地だった。

この10年間で、中田社長のアルゼンチン渡航は40回を超える。現地に太い人脈もできた。しかし、まだまだ事業が軌道に乗るところまではいっていない。「われわれには、日系移民農家を応援したいという気持ちがあります。ですから、安く買い入れたい、買いたたいりするとはできません。できれば、高く買ってあげたいほどです。しかしビジネスですから、高過ぎずは輸入した大豆やトウモロコシを買ってくれる日本の会社はいないでしょう」

ギアリンクスは岐阜県を中心国内のみならず、しょうゆ、豆腐などのメーカーに、アルゼンチンの大豆を売り込んでいる。どこでもギアリンクスの事業の意義深いことを認めてくれるが、「ところで、お値段はいくらですか？」と聞かれる。どんなに趣旨が立派でも、採算性を無視しては事業として成り立たない。ギアリンクスは、志と経済性の両立を図らなければならない。「普段は買いたたいておいて、いざという時に日本に売ってくださ」といような虫のいいことは言えません。また、普段は畑を遊ばせておいて、非常時にだけ耕作してくださいというようなのもお願いできません。普段から耕作していただき、彼らの納得する価格で購入し、そして、非常時には、日本に優先的に売ってもらうシステムを確立しなければならぬのです」

470人が出資した 市民企業

中田社長は、この事業を市民

「人が喜んでくれる事業は気持ちがいい、ということに尽きます。食料自給率の低いことを憂慮する人は大勢います。しかし、実際に具体的な行動を起こす人は少ないのではないのでしょうか」

ギアリンクスの役員は、みんな大企業の経営者ではありません。だからこそ、力を合わせ、励まし合って、この事業を軌道に乗せたいのです」

岐阜県前知事の要請で始まり、岐阜県民のためと思っ立ち上げた事業だが、日本とアルゼンチンを何度も往復しているうちに、今では、日本国民全体のためにという思いが強くなっているという、中田社長であった。

南米に夢をはせた移住者の生活と意見

ツアーに参加する前は、移住した方々は日本への望郷の念に身を焦がしているのだろうかと思われていたけれど、実際は、みなさん現実的で、そんな情緒的な人生観を語る人はいなかった。

どなたも農業が好きで、農業を一生の仕事にしたいと考えていたが、日本では土地がないために海外に出たということに一致していた。成功しているからこそ、現地にとまどっているということがあるかもしれないが、「日本に戻る気はありません」と、力強い口調だった。

われわれが南米の日系農家の支援を必要とする時が来るということは、かなりリアリティーのある話である。ギアリンクスは、事業への協力者である三人の移住者をご紹介したい。

日系農場の成功例となった パラグアイ、イグアス農協の 内山新一さん



穀物高で自信にあふれていたイグアス農協の内山新一組合長

ギアリンクスは、パラグアイの日系農協中央会と「食料供給協定」を結んでいる。また、自前の農場だけでは大豆を安定的に確保できないために、この農協から大豆を買い入れている。日系農協中央会傘下のイグアス農業協同組合は、組合員95人。組合長の内山新一さん(60)に、現状を聞いた。

「イグアス農協は今、非常に順調です。資金も潤沢で、JICA以外からの借入れはありませんが、無借金経営といってもいいと思います。しかし、これもここ数年の穀物高のおかげです。30年ほど前には、組合員に対する貸付金が焦げ付き、過剰な設備投資がたまたまありました。大豆栽培がうまくいかず、大豆栽培に切り替えた時に、貯蔵用の大型サイロを建設したのが発端でした。続いて、小麦の付加価値を高めて販売するために製粉所なども造ったために経営危機に陥ったのですが、JICAの緊急融資を得て何とか持ちこたえました。」

「写真を見ればいかに貧乏ですが、みんな力を合わせて働くというのは楽しいものです。電気がないのでランプ生活、それが不便とも思いませんでした。道路が舗装されていませんから、雨が降ればぬかるんで、森の中で毒虫に刺されたり、労働は厳しかったけれど、仕事が終わった後にみんなで一杯飲むのも楽しかった。」

「農業をまったく知らずに、夢だけを追い掛けて来た人もいましたが、そんな人は耐えられなかったですね。日本に帰ったり、他の土地に移転していった人も多いいんです。入植した人たちの定着率は3割から4割ぐらいだと思えますよ。」

久保田さんは1971年、26歳のときに入植した。不安はあったけれど、悲壮感はまったくなかったという。

「だって日本じゃ、サラリーマンの息子はどこかの農家の養子にでも入らなければ農業はできなかつたです。しかし、こちらに入植した時に、ジャングルを見てさすがに驚きました。」

久保田さんは、開墾して耕作地をつくる作業から始めなければならなかった。まず、大きな木を伐採して搬出し、建築資材として売った。これが、農業収入を得るまでの唯一の収入源だった。伐採といっても重機を購入する余裕はなかったから、みんな手作業だった。一定の土地から有用材を切り出したら、火を放って土地を焼き、その後は抜根して、畑をつくる。わずかなスペースでも畑ができると、そこへトマトやトウモロコシを植えていく。この繰り返しで農地を広げていったという。イグアス農協の2階フロアの

直したのです。」

内山さんご本人は1973年、25歳の時に福島県津若松市から入植した。農業をやりたいが故に地元には農業をする土地がなかったため、海外に出たのである。

「私が栽培している畑は4500haです。日本からの入植者で1200haの人もいます。組合員のほとんどは200ha以上は耕作しています。数年前に里帰りした時に、畑の面積を質問されたのですが、私の言う面積は、故郷の集落全体よりも広いので信じられないようでした。」

内山さんが入植したころは、イグアスはパラグアイの夏野菜のメッカだった。パラグアイの食生活を日系農家に変えたといわれるぐらい、移民の栽培する野菜類が市場にあふれた時もあった。しかし、野菜類は価格が安定せず、市場まで遠い上に、国の人口が約550万人と少ないので、農産物を売りさばくマーケットがない。それで、パラグアイの国内市場を相手にするのではなく、海外の市場を狙うべきだとなって、大豆に転じたということだった。

今では、大豆ではパラグアイの主要な生産地となっている。特に、1982年に導入した不

耕栽培によって、大豆の収量は一気に拡大した。内山組合長の話しぶりは、自信にあふれていた。組合員の粗収入は平均すれば、年間約7万ドルらしいが、昨年は大豆の価格高騰で17万ドルにもなったという。

イグアスには約700人の日系社会ができています。ここではみそやしょうゆや豆腐などをはじめ、日常に必要なものはほとんどそろそろ。言葉だって、スペイン語ができなくても日本語で十分に用が足りる社会なのである。「JICAの移住事業は終了しましたが、農業をやりたい人にはイグアスはまだまだチャンスがありますよ。ここあたりの土地は今1haが3000ドルから4000ドルです。4、5年前は2000ドルでした。土地の値段は大豆の価格に連動している

のです。大豆の価格が上がれば土地も上がる、大豆が下がれば土地も下がるんです。ブラジルは1haが1万ドルはすると思いますが、パラグアイのほうが土地は入手しやすい。それに、ブラジルは成熟した国ですが、パラグアイはまだまだ発展途上国で可能性は高いと思います。」

内山組合長は、日本の農家との違いは、粗収入から諸経費を引いて、手元に残る純益がパラグアイでは30、50%と高いということだった。広大な土地で機械化された農業を展開しているから、コストが下がるのだから。「まあ、私はどこに行っても百姓です。長女が歯科医になって首都のアスンシオンで開業しているのですが、たまに遊びに行ってもすぐ帰ってきます。私は都市では暮らせません。田舎が好きなのです。」

ジャングルの開拓も、みんな やれば楽しかったという、 久保田洋史さん



トマト栽培から大豆栽培に切り替えて成功した、久保田洋史さん

イグアス移住地ではもう一人、ギアリンクスのアドバイザーであり、中田社長に南米各地の大豆栽培情報を伝えている久保田洋史さん(62)に話を聞いた。

「農業をやりたい、東京農大の拓殖学科に

「私は、小学校5年、10歳の時に山形県南陽市から親に連れられて移住してきたのですが、わが家は運が悪かったです。指定された土地がやせていて、使えない状態です。その上、入植してから7年間、ひょうや霜の被害で作物は全滅で、ほとんど無収入の状態でした。」

移住した後、1年間だけ小学校に通ったが、父親に労働力として期待されていた米さんは、中学に進まず、畑に出て働いた。「無収入ですから、私は週のうち3日ぐらいは海外協力事業団(JICAの旧称)の直営農場で働いて、残りは自分の家の畑で働きました。後で分かったことですが、おふくろは移住する

て、いつの間にかトマトの間で寝ているということもしょっちゅうでした。着るものだって何回洗濯したか分からないような洗いざらしを着ていましたし、米袋(麻袋)を裁断して作った短パンやTシャツのようなものを着ていましたから、当時の写真を見るといかに貧乏です。」

今年1月3日にテレビ東京

で放送された「ガイアの夜明け」には、久保田さん一家が登場している。そこには後継者として息子さんが活躍していたシーンも写っていたが、その息子さんは2004年、交通事故で亡くなってしまった。久保田さん家族の悲哀を思うと、とても気の毒で、そのことに関しても質問することはできなかった。

「おやじは南陽市でブドウの果樹園をしていたのですが、狭い土地だったので、広大な土地にそこがれたのでしようね。」

「安定収入を得るまでに至らなかった。イグアス農協の内山さんのところで働いたが、国が広いので、生産地から消費地までの輸送にコストが掛かる。生産地の近くに住む人たちは低収入なので、果物を買う余裕はない。米さん一家が息ついたのは、

イグアス農協の2階フロアの

イチゴの苗を生産した時からだという。ブエノスアイレス近郊の日系農家がお得意さんだった。イチゴの苗は霜にも、干ばつにも比較的強いので、よく育った。米さんの兄は6人。すぐ下の弟は、山形県の寒河江市(旧大江町)に婿養子に入り、妹は同じ山形県の東根町に嫁いだ。二人の弟は、ブエノスアイレスでサラリーマンをやっている、農業を継いだのは、米さんと、いちばん下の弟と二人だった。米さんの話を聞いてみると、入植者にも運不運があるということが分かった。入植する土地は自分で選択できない。あなたはこのですとJICAから推薦されたところに落ち着くしかなかったのだから。その土地が沃野なのかやせ地なのかは、農作業を始めて何年かたつて、初めて知るのだから。

「この移住地は最盛期には24家族いたものの、今は4家族です。他の土地に移ったり、日本に帰ってしまいました。」

日本に研修に出掛けた時に出会って結婚した奥さんも、早くに亡くしてしまつた。お子さんはいないので、現地の女の子を養女にしている。

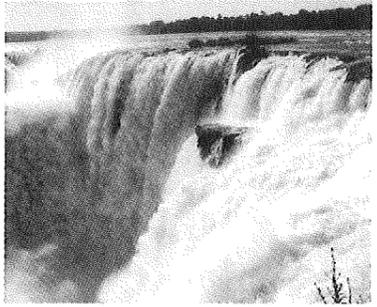
ギアリンクスは、アンデスに広大な土地を取得したが、土壌に問題があることが分かった。何が適作なのか、米さんの経験とアドバイスは、ギアリンクスになくてはならないものになっていた。



やせた土地で頑張ってきた米邦久さん、養女のお母さん久保田さんと、左はお母さん久保田さんと、養女のお母さん久保田さんと、左はお母さん久保田さんと、養女のお母さん久保田さんと

アルゼンチン・パラグアイ

写真旅日記



「イグアスの滝」

ツアー中の観光の目玉は、アルゼンチンとブラジルの国境にある、イグアスの滝見物。確かに怒濤の大迫力だった。滝を展望台から眺めた後は、下に降りて、全員、救命胴衣を着けて大型のゴムボートに乗った。滝つぼのある崖に向かってぎりぎり突っ込んで、急旋回して戻ってくるというスリリングなショーを体験。手荷物は渡されたゴム袋にしまわれて各自、膝の中に抱える。全員、下着までびしょ濡れだった。

ボートが転覆して死者が出たことはないのだろうかと思いつつ、内心はハラハラだった。参加者の中にはひょうきんというか、滝つぼを指さして、「まだまだ、もっと突っ込めえ！」と操縦士をおおるような人もいて、びくびくものだった。

「日本男児」

ブリーフ一丁になって、ボートのへさきで雄たけびを上げているのは、アルゼンチンのアンデス農場でニンニクの加工場を立ち上げた、岐阜県の㈱センコー技研・竹中佳美社長。このぐらいの勇猛心がなければ外国で商売はできない(!!)

「ストリートダンサー」

アルゼンチンタンゴ発祥の地といわれている古い町、カミニート。日本でいえば浅草か。街角ではストリートダンサーが踊っていた。



アルゼンチンの印象を一言で言えば、「とにかく遠い」である。われわれ視察ツアー一行はユナイテッド航空を利用したのだが、ワシントン空港での乗り継ぎのための待ち合わせ時間も入れると片道33時間もかかった。飛行機の中で出された食事が片道だけでも6回。アルゼンチンの先は南極だから、日本から最も遠い国ということになる。今年(明治41年(1908年))、笠戸丸が781人の移民をブラジルに運んでから100年になる。記念行事が各地で計画されているが、移民した人々には、よくぞたくましく異国の地に根を生やしてくれたと尊敬の念を感じる。今回のツアーの目的は、日系移民農家の視察と交流だったけれど、観光がまるでなかったわけではない。以下、スナップ的に紹介したい。

土産店をのぞいたら、Tシャツや革製品、絵はがき、アクセサリーなどに混じって、マラドーナとゲバラの写真を売っている。この国では、王、長嶋以上の国民的英雄のようだ。

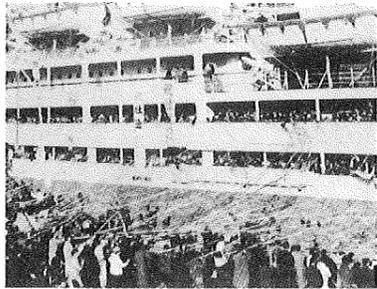
「マラドーナ」

アルゼンチンについて、日本人はどれだけのことを知っているのだろうか。首都、面積、元首、人口、政治体制、

「日本人会」

パラグアイのイグアスでは、日本人会の方々が歓迎会を開いてくれた。婦人部の人たちが、おすし、冷ややっこ、タケノコ煮、ワラビのおひたし、コンニャクなど手作りの和食でも

てなしてくれた。ツアー参加者が出身県を告げると、同県の人植者は懐かしそうに話し掛けてくる。それぞれのお国なまりで話されるのが面白い交歓風景だった。イグアスの日本人会は700人。日常の暮らしは日本語だけで用が足りるといふ。1世は60歳から70歳ぐらい、今、2世が後継者となりつつあって、端境期だといふ。



「移民船」

イグアス農協の2階フロアに、移民の足跡を示す写真が展示されていた。昔、移民は神戸移住センターに集められ、健康診断などを受けた後、神戸港から出港した。見送りの人が大勢いるが、全国から集まった移民者の親族が港にいらるはずもなく、実は毎回、近くの小学生などが見送りに来ていたのだという。第一回の芥川賞の受賞作、石川達三の『蒼氓』は、1930年、らぶらた丸で、神戸からブラジルのサントス港に向かった移民モデルにしたものだ。この時は、香港、バンコク、セイロン(スリランカ)を経由し、南アフリカ回りで45日間かかっている。

「開拓小屋」

ジャングルの開拓の合間に入植家族が食事を取っている写真。戦前の移住者とは違って、戦後、1960年代から70年代にかけての移住者には悲壮感はなく、明るくはつらつとしている印象だった。労働は厳しかったけれど、今思えば楽しい思い出ばかり。というのが、交流会で会った、ある1世の回想だった。プロ野球・元ヤクルトの岡林投手も、この写真のどこかに写っているらしい。

「パラグアイとアルゼンチンの国境」

パラグアイの税関は、のんびりとしたもので、日本の田舎の無人駅のような建物だった。税関の係官が一人しかいなかった。アルゼンチンとは、「早く、船を回せえ！」と、大きな声で叫べば届くような距離である。写真はパラグアイ側について、アルゼンチンからの渡し船を待っているところ。ちなみに、左手前方はブラジル。



「タンゴショー」

「セニョリータタンゴ」は、一昔前、日本で流行した「ミカド」のようなシアターレストラン。店の前には、世界各国からの観光客が乗ったバスがずらりと駐車している。最初の1時間は食事、それが終わってタンゴショーが始まる。舞台上に観光客を引っ張り上げて、男性には女性ダンサーが、女性には男性ダンサーが絡んで記念写真

「肉料理」

を撮ってくれる。アルゼンチンのレストランは、どの店も午後6時、7時はガラガラで、8時ころからぼつぼつ客が入り始め、9時ごろやっと客席が埋まる。

アルゼンチンは肉の好き

きな人にはこたえられない国だ。アサードという名物料理は、大きな金串に牛肉を刺して、金網で焼き、それをそのまま客席まで運んでくる。あらゆる部位の肉が供されるが、すべてを平らげるのは不可能に近い。テーブルにはナイフとフォークとハサミがあり、少ししか食べられない人は、ハサミで自分の分を切り取る。この料理のおかげで、「ポキート」というスペイン語を覚えた。「少し」という意味である。とにかく、肉類が安い。日本の100gの値段で1kgの牛肉が買える。この国では、コマ切れ肉、切り落とし、薄切りロースというようなみみつき肉の売り方はしていない。なかった。

「八百屋さん」

市場を見物すれば、その国の庶民のエネルギーが伝わってくる。ブエノスアイレスの八百屋さん。この果物や野菜の中には、日系移民が汗を流して栽培しているものもあるはずだ。日本のようにトレーに乗せて、パッケージにして並べていない。大らかとも映る光景であった。



国際化、グローバルという言葉は氾らんしているけれど、恥ずかしい話、パラグアイとウルグアイは南米のどこにあるのか分からなかった。中米と南米の国々を正確に区別することもできず、通貨の違いも分からなかった。つまり、本誌は無知だった。食料危機が来ると、これらの国々のお世話にならないかならない、平常時から南米に関心を持つておこうと反省した旅だった。